

連載

新興国ウォッチ！ < 第 16 回 >

ボーモルのコスト病

多田 忠義

ボーモルのコスト病とは

ウィリアム・ボーモル (William J. Baumol) とウィリアム・ボーエン (William G. Bowen) が 1966 年に出版した『舞台芸術 芸術と経済のジレンマ (Performing Arts: The Economic Dilemma)』で指摘した内容を「ボーモルのコスト病 (他にボーモル効果など)」と呼んでいる。その内容は、クラシック音楽を演奏するのに必要な演奏者の数や、ある演劇を実演するのに必要な舞台役者の数は、昔も今もほとんど変わらない、つまり生産性は上昇しないことを指摘した点である。こうした低生産性の分野であっても、賃金の上昇は避けられないことから、コストは増大してしまう。一般に生産性の向上は、労働者一人当たりの資本増加、技術の進歩、労働者のスキル向上、よりよい経営、生産量増大に伴う規模の経済の実現、によって引き起こされるといえる。しかし、実演芸術は、同様の観点で生産性の向上を評価しにくい (Heilbrun 2003)。こうした議論を踏まえ、ボーモルのコスト病では、公共・福祉サービスにおける労働生産性の改善は難しく、結果として国民総生産に占める人件費の割合は増大せざるを得ないと論じている。

前回までの連載で紹介した「中所得国の罠」に関する Felipe 氏の議論によれば、先進国では脱工業化によって経済成長を成功に導くことができた一方で、途上国では、工業セクターよりも生産性の伸びが遅いサービスセクターの成長によって長期的な成長が形作られると指摘した。このような形態を、ボーモルのコスト病

を踏まえて「asymptotic stagnancy (漸近的な停滞)」と指摘している。

GDP に占めるサービスセクターの割合と GDP 成長率との関係

図表 1 は GDP に占めるサービスセクターの割合と GDP 成長率との関係を示している。不況によるマイナス成長の年もあるが、サービスセクターの割合と GDP 成長率の間には負の相関傾向があり、ボーモルの指摘は一定の説得力を持つ。

一方、経済発展段階では、鉱工業における生産性向上やサービスセクターの割合増加が必然的に発生し、成長率鈍化は避けられない。例えば、9月11日に中国の李首相は「中国の経済成長は高成長から中成長に変わった」との認識を示したうえで、経済成長率を年7%台に安定化させられるよう、産業構造の転換や労働生産性の向上など、構造改革等の政策を押し進めると表明している。

参考文献

Heilbrun, J. (2003) "Baumol's cost disease" Ruth Towse Eds *A Handbook of Cultural Economics*. Edward Elgar Publishing.

図表1 GDPに占めるサービスセクターの割合とGDP成長率との関係(1980~2012年)

